

井出千昌

花言葉を知つてから



井出千昌 (いで・ちあき)

1959年3月5生まれ。魚座のA型。フェリス女学院大学卒。本業はファッション関係のライターだけど、漫画の原作にもトライ。単行本では、講談社KCフレンド『それいゆパラダイス』(作画・清水佳子)がある。著書は、『ハートにコスモス』『春休みの眠り姫』『ポケットに、ハイネ』『海辺のトリステス』『ふたりの微熱クリスマス』『16ビートで恋したい』(講談社X文庫)。趣味は、かわいくて、ちょっとなさけない感じのするものを、鑑賞したり、集めたりすること。ちなみに、いま、いちばんのお気に入りには、6歳以下の子供が描いた仮面ノリダーの似顔絵。



花言葉を知ってから

井出千昌

●

1989年9月5日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

本文印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

カバー印刷——半七写真印刷工業株式会社

©井出千昌 1989

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本について
のお問い合わせは、3局企画部あてに、お願いいたします。

講談社X文庫

花言葉を知ってから

：

井出千昌





目次

花言葉を知ってから..... 5

あとがき..... 214

イラストレーション／高田祐子^{たかだゆうこ}

花言葉を知ってから

「ああ、懐かしいわ。このへんの景色って、もっと変わってるかと思ってた」

美帆は、車の窓から流れていく街並みを見つめ、嬉しそうにつぶやいた。

「東京も、このくらいはずれに來ると、たいして変わらないもののねエ」

助手席の母親も、美帆の指さす方向に目をむけたりして、上機嫌だ。

「こうしてると、仙台で暮らした4年間で、ウソみたいね、あなた」

「うん、おれももう少し変わってるかと思ってたよ。要するに田舎なんだな、ここらへんは」

父親がハンドルを右にきりながら、バックミラーをのぞく。

「美帆、うしろのトラック、ちゃんとついてきてるか？」

美帆は振り返って、自分たちの車のあとを走ってくる日通のトラックを確認した。

「だいじょうぶよ、パパ」

「サテ、そろそろ見えてきたぞ、新しい我が家が」

車の前方に、二棟ふたむねしかない小さなアパートが見えてくると、美帆の目は、その建物に釘くぎづけになった。

「東亜銀行ひばり台アパート」と書かれた門の前で、車が停とまる。

「私、昔のくせで、A棟のほうに入ってしまったそう」

車から降りた美帆が、アパートを見あげてはしゃぐと、母親が笑った。

「今度の家は、B棟の206号室よ。まちがえないようにしなくちゃね」

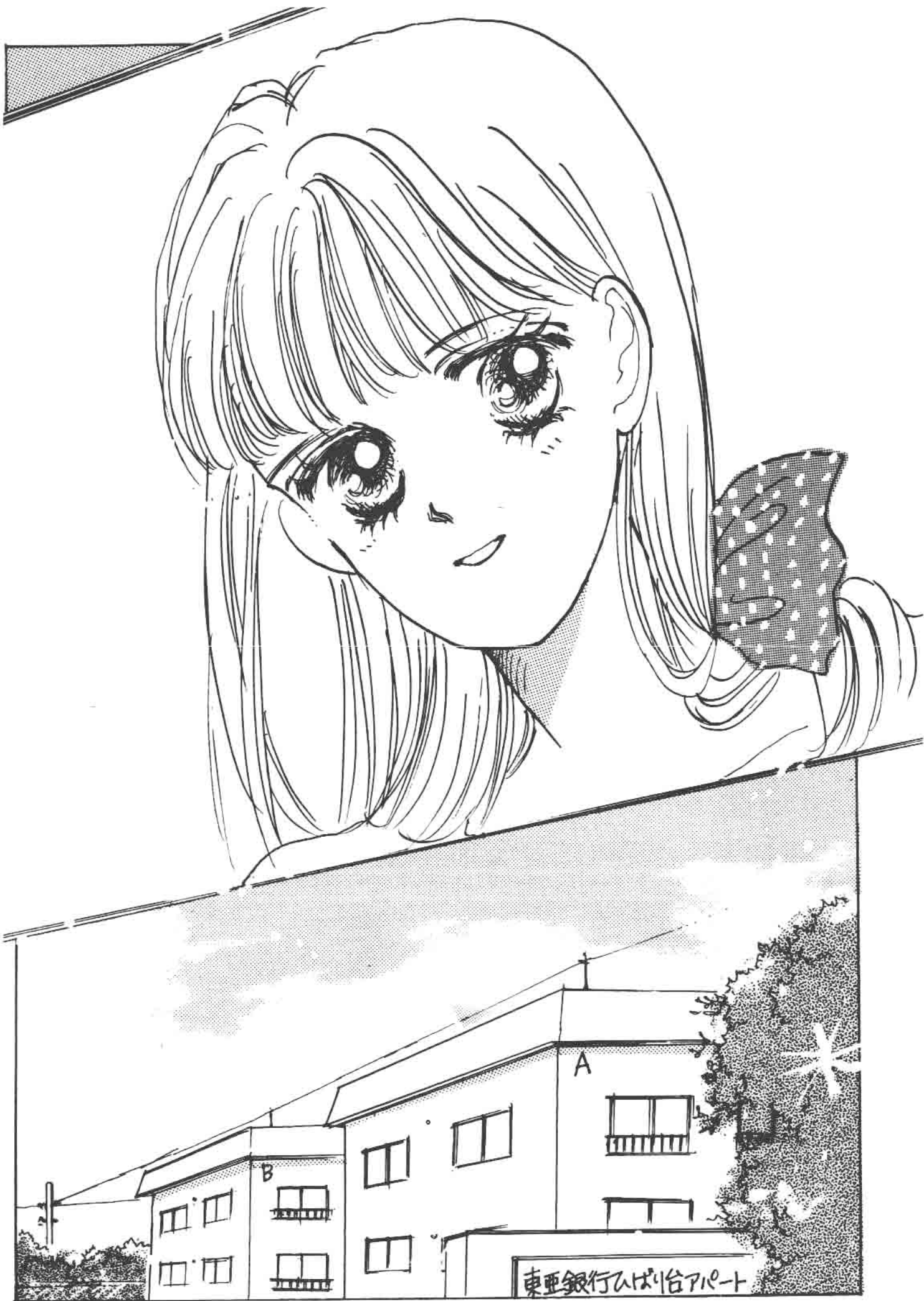
荷物を降ろしていると、エプロンをつけたおばさんたちが駆け寄かってきて、母親の肩をたたいた。

「奥さん！ まあ、お久しぶりです！」

「あらまあ、田中さんの奥さん。橋田さんも、まだこちらでしたの？ 皆さんお変わりありませんでした？」

母親は、同級生に会ったように喜んでいる。

「萩原はぎわらさんが、今日ここに帰ってこられると聞いて、あたしたちお手伝いに……。まあま



あ、あなた美帆ちゃん？　ちよつと！　美人になったわねエ、奥さん！」

おばさんたちにお世辞を言われ、美帆はちよつと赤くなつて、おじぎした。

「美帆ちゃん、おばさんのこと覚えてる？　もう、高校生かしら」

「ええ、東ひばり台高校に通うことになりました」

「東ひばり台？　よかつたわねえ、あそこはいい学校よ」

おばさんたちは、美帆と母親を交互に見ながら、忙しくおしゃべりする。

「それに、あそこは電車で二駅だから近くていいわよね。でも奥さん、編入手続き、タイヘンだったでしょう」

「ちようど2年生に一人、空あきがあつたので、わりとスムーズに」

「あらよかつたわねエ。美帆ちゃんは、おできになるから。うちの和江なんてね……」

美帆は、おばさんたちのおしゃべりに少々閉口しながら、父親を手伝つて、トラックから荷物を降ろしはじめた。

美帆の父親は、東亜銀行に勤めている。

つい先日までは、仙台支店の次長だったのだが、9月の異動で神奈川県大船支店おおふなの支店長に就任が決まり、美帆たちはあたふたと1週間で荷物をまとめ、仙台の社宅から、東京のは

ずれのひばり台アパートに引越してきたのだ。

美帆が生まれてから、なんと10回めの引越しだった。

「銀行員の宿命だからとはいえ、美帆のことを考えると、かわいそうになりますわ」

ダンボール箱を机代わりにして、近所の長寿庵からとった引越しそばを食べながら、母親がこぼした。

「おれだつてうんざりだよ。ここの荷物がかたづいたら、大船のほうをまとめなくちゃいけないんだから」

「あなた、明日からお勤めなんですよ？ 私、明日大船に行つて、荷物の整理しますから。いろいろ買わなくちゃいけないものもあるし、今月は大出費だわねエ」

母親が、またこぼす。

東亜銀行の社員で、自宅を持たない者は、銀行が管理している社宅に住むことが義務づけられている。

大船への転勤が決まったときに、美帆たちは、とうぜん神奈川県に引越すのだろうと思っていた。ところが神奈川には適当な社宅の空きがなかったために、電車で3時間もかかるひばり台アパートの一室が与えられたのだ。

このアパートに、美帆たちは1年間だけ住んだことがあった。今回はB棟だが、5年前は

A棟の301号室が、美帆たちの家だった。

なじみのあるアパートで美帆は嬉しかったのだが、父親はシブい顔をした。ここから大船までは遠すぎて、とても通えないからだ。しかたがないので、父親は大船支店の近所にワンルーム・マンションを借りた。当分の間は単身赴任ということになる。

「ホントに上の人って、融通がきかないんだから。私、社宅なんかに住まわせていただかなくてけっこう。大船にアパートでも借りて、親子3人でいっしょに住みたいわ」

「まあまあ、銀行のほうでも、手頃な社宅が空きしだい、うちを優先して入れてくれると言ってるわけだから、そんなに長い間のことじゃないさ」

二人の会話を聞いていて、美帆は不安になった。

「長い間じゃないって……、それじゃまたすぐに転校しなくちゃいけないってこと？」
「……」

おそばを食べていた父親の手が止まる。

「ウン、まあ、そういうことになるかもしれないから、編入試験にそなえて、ちゃんと勉強しておかなくちゃダメだよ」

3人の間にシラけた空気が漂い、急におそばが、おいしくなくなった。

——転校なんて、大嫌い。せつなくなかよくなれた友達と別れるのは、編入試験なんかよ

り、ずっと辛いんだもの。

「ごちそうさま」

美帆はおハシを、ダンボールの上へ置いた。

「なんだ美帆、もうごちそうさまなのか？」

「だって……。パパが食欲なくすような話、するんだもん」

「ホントですよ、あなた。美帆が何度転校したか、覚えてらっしゃいます？ 7回よ、7回！ そのたびに悲しい思いをさせて……。もし美帆がグレたりしたら、あなたのせいですからね」

「なんだよ二人して。あんまりおれをいじめないでくれよ」

父親が、なさけない声を出した。

「萩原」と書かれたネーム・ペーパーを、206号室のドアのプレートに入れると、美帆は買い物がてら、散歩にでかけた。

なにもかも、5年前と同じだ。

A棟とB棟にはさまれた形で、小さな広場があつて。近所の子供たちが、砂場で遊んでいるのが見えた。

あの頃は、砂場のうしろに、だれかが飼^かっていたコリーの犬^{いぬ}舎^{どや}があつたのだが、いまはなくなっている。変わった点^{てん}と言^いえば、それくらいかもしれない。

——あのコリーの御主人様も、きつと転勤^{てんきん}しちゃつたのね。

昔^{むかし}のことを一つ一つ思い出しながら門^{かど}を出て、そのままA棟^{てい}の裏手^{うらで}にある商店街^{しょうてんがい}へむかう。

確かめたいことが、あつた。

もし転居^{てんこ}していなければ、A棟^{てい}と道^{みち}をはさんで、小さなお花屋^{はなや}さんがあるはずだ。

美帆^{みほ}が中学1年のときに住^すんでいたA棟^{てい}301号室^{ごうしつ}の窓^{まど}からは、すぐ下に、その花屋^{はなや}が見えた。

お店の名前は「齋^{さい}田^た花店^{はなてん}」。普通^{ふつう}の一軒屋^{いっけんや}を半分^{はんぶん}だけ花屋^{はなや}に改造^{かいぞう}したような小さなお店で、美帆^{みほ}は毎日、齋^{さい}田^た花店^{はなてん}を窓^{まど}からながめて暮^くらしていたのだ。

花^{はな}が、好き^{すき}だつたわけではない。

齋^{さい}田^た花店^{はなてん}には、当時^{たうじ}高校^{こうこう}2年生^{にんせい}の彰^{あきら}という男^{おとこ}のコがいた。

美帆^{みほ}が毎日、窓^{まど}から花屋^{はなや}をながめるのは、彰^{あきら}の姿^{すがた}をすこしでも多く見^みたいからだつた。

——いまでもあのお店^{おみせ}、あるのかしら。

美帆^{みほ}は、アパート^{アパート}を囲^{かこ}む銀^{ぎん}色^{いろ}のフェンス^{フェンス}を指^さで触^ふりながら、ゆつくりと、花屋^{はなや}のあつた場^ば

所へ近づいていった。

一步、前へ進むたびに、ハートがトクンと鳴る。

トクン、トクン。

鼓動が耳に響くほど大きくなったとき、美帆は足を止めた。

「……………」

花屋は、昔と変わらない場所に、建っていた。

「あんまり、変わってない……………」

お店は、すこしだけおシャレに模様変えされて。

5年前にかかっていた「斎田花店」という古びた看板は取りはずされ、かわりに「FLO
RIST・SAITA」という白いプレートがかけられている。

——彰くん……………」

心の中で、その名前を呼んでみたら、キュンと胸が痛くなつて——。

美帆は、はじめて彰に会った日のことを思い出していた。

その日、美帆は友達のバースデイ・パーティーに招待されていた。

ひばり台に引っ越してきて、まだ1か月。